

年以前の日本の絹

考古学者は、絹織物が初めて生産されたのはおよそ12,000年前の中国で、技術が日本に持ち込まれたのは紀元前2〜3世紀頃であると考えている。飛鳥時代（552〜645年）には、中国本土と朝鮮半島から莫大な数の人が日本にやって来た。彼らは、養蚕、絹の糸取り、染色、製織の革新的技術など、以前の日本で知られていなかった手法と技能を持って来た。

日本の気候は養蚕によく適合しているが、江戸時代（1603〜1867年）に日本が自らに課した鎖国により、ヨーロッパの養蚕技術の進歩はまったく知られることはなかった。日本の養蚕は、1800年代後期まで家内工業のままであった。

しかしこれは、絹が利益にならなかったということではない。絹商人は、同じ階級内では、最も裕福で強い力を持つ集団の一部を構成した。絹は上流階級（侍、商人、公家）のための生地であった。しばしば商人は絹を売るだけでなく、蚕の飼育場、糸取り作業、織手、染物師を指揮した。

1868年、新政府が徳川幕府に取って代わり、日本は急速に近代化し始めた。中央政府は、意欲的な産業・農業プログラムを用意し、日本を西洋の大国と同水準に引き上げるべく前進を目指した。ヨーロッパでは、病気により蚕が次々に死亡していた。日本政府は、絹を輸出することで国を裕福にすることができると考え、売り込みを始めた。新しい最先端の糸取り工場が、1872年、群馬県の富岡に建設された。日本の「絹革命」が始まっていた。